

# 東大阪新聞 創刊90周年 記念講演会

## 生と死を見つめて

### 平穏死からコロナまで

2500人以上看取り平穏死の尊さを訴え続ける長尾和宏医師は、コロナ禍のなか1200人以上のコロナ患者の診療に当たっている。町医者が最初の砦になり感染拡大を防ぐことが何より重要だと力説する長尾医師。東大阪新聞創刊90周年記念に「生と死を見つめて～平穏死からコロナまで」と題して講演いただきます。

講師 長尾クリニック院長・医学博士

令和4年(2022年)5月7日(土)

長尾和宏

14:00～16:00(開場13:30)

東大阪市文化創造館 大ホール

東大阪市御厨南2-3-4

TEL 06-4307-5772

入場無料  
申込不要



#### 【講師紹介】

長尾和宏(ながお・かずひろ)

1958年香川県生まれ。1984年東京医科大学卒業、大阪大学第二内科に入局。1995年兵庫県尼崎市で開業。複数医師による年中無休の外來診療と在宅医療に従事。医療法人社団裕和会理事長、長尾クリニック院長。医学博士、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授ほか役職多数。

著書は「痛くない死に方」「平穏死10の条件」「歩き方で人生が変わる」「ひとりも、死なせへん」など多数。映画「痛くない死に方」の原作者、映画「けったいな町医者」の被写体として作品へ貢献したことが評価され、ロサンゼルス日本映画祭でBest Humanity Awardを受賞。



問い合わせ ☎ 072-926-5134

主催  株式会社東大阪新聞社

【本社】〒577-0802 東大阪市小阪本町1-1-7 エフエスビル 2F

TEL 06-6720-4601 FAX 06-6720-4603

【八尾柏原支社】〒581-0013 八尾市山本町南6-2-29

TEL 072-926-5134 FAX 072-921-6893

関連講演会 大阪における新聞の歴史 主催 文化創造倶楽部

入場無料  
申込不要

#### 講師紹介 福山琢磨



1934年鳥取県生まれ。1952年国際新聞社入社。1954年大阪府高校新聞協会印刷局を設立し、事務局長に。1956年に朝日賞第1回高校新聞コンテスト実施。同年大阪市立扇町第二商業高校卒。(株)新聞印刷を設立し、代表取締役。1984年記入式自分史ノート考案発売、全国を講演行脚し広める。1991年(株)新風書房を設立し、代表取締役に。NHKほか各カルチャーセンターで自分史講座の講師を務める。

著書や編集発行物として、1988年から庶民の戦争体験をまとめた「孫たちへの証言」1～33集、「大阪春秋」他多数。

戦後、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、産経新聞等が大阪でどのようにして生き残り、読者を増やしてきたか。新聞・自分史研究家の福山琢磨氏に講演いただきます。

講師 株式会社新風書房 代表取締役 福山琢磨

令和4年(2022年)5月7日(土)

10:00～11:30(開場9:30)

東大阪市文化創造館 創造支援室 C1・C2

# 喜怒哀楽 地方にこそニュースがある

## 関西知探解



東大阪新聞社の八尾市柏原支社で編集作業を行う小野元裕社長(左)と八尾市(右)の西川博明撮影

# ほっこり砲 「ええ話」に歴史あり

## 東大阪新聞 来年創刊90年

小さな話題でも取材に飛んで参ります。大阪府東大阪市に本社を置き、隣接する八尾市や柏原市の中河内エリアの地域情報を伝える「東大阪新聞」が来年、創刊90年を迎える。かつては作家の今東光も執筆陣に加わっていた老舗地域紙だ。インターネットメディアの台頭で、ローカルジャーナリズムの担い手である地域紙も苦戦を強いられているが、東大阪新聞は、地域の人々をつなぐ「ええ話」を伝え続けようとしている。(西川博明)



創刊初期に連載され、八尾の地域史などを紹介した記事「河内史談」はのちに書籍にまとめられ、八尾市の中学校副読本として活用されたという

### 月2回の発行

都賀青真内の一部地域を発行対象エリアとする地域紙、東大阪新聞は毎月1、15日の2回発行を続けている。産経新聞などの一般紙と同じサイズで、2〜4ページで構成し、モノクロ印刷する。

「気が付いたら中国大陸を88万キロ走っていた」「八尾の大輝製作所、新工場竣工」「母の日に染み文字でももい伝える」「柏原市役所新庁舎完成」

地域経済や政治の話から、市民の機嫌まで幅広く、丁寧に伝える。早生企画として続くのが「明日の有名な人」。まだ、広く知られていないわけはないが、地域で活躍する人々を紹介する。会社新聞に巨大な像をつくった経営者や、

「47歳の女性を治療します」と掲げる整骨院院長ら、ユニークな人物を取り上げてきた。

「私を社長になってからは、事件・事故などの話は一般紙にお任せしています。一般紙がなかなか取り上げない『ええ話』を載せるのが編集方針」と語る。平成24年秋から6代目社長を務める小野元裕社長(51)だ。

インターネットを通じて情報があふれる時代にストレスが生まれ、生きづら人もいる。読んでほっこりする話を載せたい」と奮起する。

### 妻と二人三脚

八尾市の市長選挙の調査によると、昭和7〜8年ごろ、東大阪新聞の創設社長、三浦元氏が八尾で地域

**「東大阪新聞」の主な歴史**

昭和7〜8年ごろ	和歌山県出身の三浦元氏が八尾で地域紙「菊水日報」創刊(戦時中に廃刊)
22年6月	「菊水日報」復刊の形で、八尾で地域紙「東大阪新聞」にして創刊。執筆メンバーに作家の今東光氏らが名を連ねた
31年	布施市(現・東大阪市)の地域紙「中外タイムス」と合併
40年ごろ	日刊紙として土・日曜除く週5日発行。近鉄沿線で販売も行った
50年代	月2回(毎月1日、15日)発行に
平成24年10月	小野元裕さんが社長に就任
令和4年	創刊90年を迎える

紙「菊水日報」を創刊したのがルーツ。戦後に東大阪新聞として復刊された。

府内には東大阪新聞のほかにも、地方・地域紙が十数紙発行されているとされるが、その中でも最も古い歴史を持つという。

昭和20年代に連載された記事「河内史談」は八尾の地域史などを紹介して好評を博した。執筆メンバーには、大阪府八尾市の寺院「天台庵」住職を務めながら「要旨」など河内を題材にした作品を多く残した直木賞作家、今東光も名を連ねた。

河内史談はその後、書籍にまとめられ「八尾市の中学校副読本としても一時期読まれていた」(小野社長)といい、東大阪新聞は

ローカルジャーナリズムの担い手としての役割を果たしてきた。昭和49年ごろは日刊紙として近鉄沿線で販売されていたほどよく読まれたという。

しかし、インターネットが普及し、新聞がほかのメディアとの競争を迫られる中、今の発行部数は千部に。社長も小野社長と妻の2人だけ。このほか、業務委託する記者から送られてきた記事で紙面が出来上がるが、小野社長は取材記事やカメラマン、紙面構成を考える編集長を兼ねるだけでなく、広告を取る営業、新聞を配達する配達手続まで一人で何役もこなす。

「公私境目はないとこ

### 映画配信挑戦

コロナ禍の影響だけではない。新聞を取り巻く環境は年々、厳しくなっている。地方・地域紙に詳しい武蔵大(東京)の松本恭幸教授(地域メディア論)は、インターネットメディアの台頭によって、全国紙を含めた新聞発行部数が減少していること、1「毎年のように全国各地の地方・地域紙が休刊、廃刊に至っている」と指摘する。

そのうえで「全国各地で地方・地域紙がなくなれば、地元のニュースを発信する担い手がなくなる」と懸念。各紙の経営体力が落ちる中で、各社が新聞発行を続けるためには、各新聞社が持つブランド力や読者層などの資産を生かした「新聞以外の新規事業の開拓が必須」とも指摘した。

東大阪新聞も動画配信で新聞記事を届けるなど、新たな試みに挑戦しているが、一方で、小野社長は新聞発行にばかりはこだわらない。「あんなにこんなことをしてたんや」「あの店ほこんなことをしてたんや」「あの会社ほこんなことをしてたんや」と地域を回るための手段として役立つことに疑いはない。「地域紙はその地に暮らす人にとって欠かせないコミュニケーションツール」と言い切った。



大阪・中河内エリアでは「東大阪新聞」のほかにも「河内新聞」といった地域紙もある

インタビュー… 荒井薫  
グラフィック… 松原真美

平成10年入社、令和元年12月から大阪総局東大阪駐在。今回の取材で東大阪新聞の小野元裕社長の独断で「明日の有名な人」の認定証をいただいた。一般紙も読者に需要がありそうな地域密着の記事をさらに増やすのが大事と刺戟も受けた。



にしかわ・ひろあき